

高退教 岡山

第 151 号

2017年10月

岡山県高校・障害児学校
退職教職員の会

〒703-8258

岡山市中区西川原255番地

岡山県教育会ビル3F岡山高教組気付

TEL (086)272-2245

Fax (086)272-2242

目 次

—みんなで21世紀の未来をひらく—教育のつどい In 岡山

1

教育フォーラム7 現地青年企画 朗読劇「その時10歳のわたしは」を振り返って

—

——岡山支部 居郷 毅

第5分科会 理科教育 本物に接する体験を子どもたちに！右翼の妨害行動を許すな！

——岡山支部 小川 澄雄

第16分科会「思春期・青年期の進路と教育」 退職後もがんばる姿に感銘

——岡山支部 美甘 晃

第17分科会 ジェンダー平等と教育 久しぶりに学習意欲が沸いてきた

——岡山支部 和田 知恵子

第18分科会「子どもの人権と学校・地域・家庭」 岡山開催を改めて実感した

——岡山支部 岸本 幹雄

第23分科会 文化活動・図書館 「遊びは子どもの主食です」に共感

——岡山支部 山本 和弘

特設分科会「特別の教科道徳」を考える 重い気分の方で、勇気づけられた一日

——備西支部 清水 親義

「よく続く旅のはなし」

——備南支部 武田 昭一（埼玉在住）

無謀な世界一人旅(第1回)

——備南支部 正保 宏文

休憩室 ジャガイモ栽培法——備西支部 清水 親義

2017. 3. 11 に少し考えたこと。（第2回）——岡山支部 佐藤 静雄

ーみんなで21世紀の未来をひらくー 教育のつどい（教研全国集会）

成功のため、高退教も奮闘

「憲法と子どもの権利条約がいきて輝く教育と社会を確立しよう」をテーマに、全国の教職員、保護者、研究者、市民らが岡山に集まり、8月18日(金)から3日間の日程で「みんなで21世紀の未来をひらく教育のつどいー教育研究全国集会2017」が開かれました。

岡山高退教も、現地実行委員会の一員として、「つどい」成功のために奮闘



した。初日は岡山シンフォニーホールで開会の全体集会と7つのフォーラム。2、3日目は30の分科会に分かれて、一人ひとりの子ども達が生き生きと成長できる教育めざして語り合いました。

毎回のことながら、集会を妨害しようと、右

翼団体の騒がしい威嚇街頭宣伝が繰り返され、これへの取り締まりを名目に、警察による物々しい警戒体制が敷かれる中での「つどい」でした。

酷暑の中、全国の仲間を迎えてひらかれた「教育のつどい」。警備、会場係などの要員や分科会参加者として、それぞれの事情や条件に合わせて、つどいの成功に貢献された会員の皆さん。たいへんお疲れ様でした。



行事の企画・実行や、分科会の担当として「つどい」に参加された会員から、報告や感想を寄せていただきましたので、以下、ご紹介します。

朗読劇「その時 10歳のわたしは」を振り返って

岡山支部 居郷 毅

教育フォーラム7「世代を超えて語り継ぐ人権・平和～戦後70年の岡山～」の第2部で上演した朗読劇『その時 10歳のわたしは』は、終戦時に10歳だった方々の手記を舞台化したもの。

昨年6月市民文化ホールで初演した舞台をもう一度、ダイジェスト版でもいいから「全国教育のつどい」で上演できないか。高教組の有馬副委員長からの打診を受け、手記の編集者であり昨年の舞台の総監督でもあった高垣章二さんに相談してから5ヶ月余り。当日の上演にこぎ着けるまでには、さまざまな障害を乗り越えなければならなかった。

当初は、高教組青年部が前面に出て、われわれは裏で支えるという形を構想していたが、上演台本の作・構成・演出をお願いした森脇、家野の両氏をはじめ、結果的には高退教を含む中・高年層のメンバーが主導することになった。

人集めは困難を極めた。担当の松本書記長の気苦労はいかばかりだったか。打ち



合わせ、練習時間の確保もままならず、全員揃ってのリハーサルはついにできずじまい、ぶっつけ本番だった。

それでも、舞台を観てくださった方からは次のようなうれしい感想をいただいた。

「時代背景を盛り込みながら、手記をもとにした体験の重さを伝える工夫に満ちた演出でした。あの時代を生きた人々の情感がピシッと結晶化され、今の私たちをとりまく世界の動きについて考えざるを得ませんでした。」

脚本・構成、演出、音響・映像の各スタッフは 60 代～40 代。キャストは 60 代から 10 代の高校生、小2 女児まで。「その時 10 歳」だった方々の戦争の記録と記憶を、文字どおり 4 世代にわたって受け継いでゆく取り組みだった。今振り返って改めて、そこに参加できたことを感謝するとともに、第 2 世代としての責任を痛感している。

第 5 分科会 理科教育

本物に接する体験を子どもたちに！

右翼の妨害行動を許すな！

岡山支部 小川 澄雄

8 月 18 日（金）～20 日（日）の三日間岡山市で開催された教育のつどい（全国教研）に要員として参加した。初日の全体集会では丸善からシンフォニーホールに抜けるエスカレーター横の警備係りとして、また、二日目・三日目は私自身は社会科教員でありながら、理科教育分科会の分科会責任者をまかされた。

理科教育では、なんとなく生物や物理・化学の分野が中心なのだろうと思っていたが、今回の「教育のつどい」では、地学・天文の分野がレポートの数でも分科会運営の時間配分としても大きな位置を占めていた。これは、大雨による広島市のがけ崩れをとりあげたレポートに象徴されるように、気候変動がもたらす災害の多発が影響しているのかもしれない。「磁石 小学校 3 年の実践から」「川と地形（小 5 プランと実践）」「雲と天気の変化（5 年）」「高校地学基礎 地震と火山をどう教えたか」「地学基礎における授業実践 科学の視点で自然をみる目を身につけよう」「8.20 広島豪雨災害に学ぶ—高校 2 年地学基礎での防災教育」などなど・・・

また、太陽の大きさ・地球と月の距離を実感させるために、距離を測りつつ校庭・道路に生徒を並ばせていったというレポート「太陽と地球・月の大きさと距離を感動的に理解する」もあった。この分科会では、教室での教科書解説的な授業より、子どもたちに本物を体験させる（教室の外に出る）ことを大切にしていたことも特徴の一つだったように思う。レポート報告の一つひとつから真剣に学ぼうとする参加者の姿勢が感じられ、素敵な分科会だったと思う。ただ、要員はいたものの、岡



山からのこの分科会参加者がいなかったのが残念だった。

教育にたずさわる教師たちが、教育に関心を持つ父母・市民団体の人たち・国民とともに、より良い教育を探っている姿に接することができ、幸せな時間を共有できてありがたかった。「教育のつどい」で刺激を受け、本屋で見つけた『地学のツボ—地球と宇宙の不思議をさぐる』（鎌田浩毅著、ちくまプリマー新書）を面白く読んだことも、要員参加の副産物となった。

今回感じたことをもう一点指摘したい。

いつの間にか「全国教研に右翼の妨害はつきもの」という感覚を持たされていて、街宣車が大音量でがなり立てても、正直な所その時は「いつものこと」と私自身が受け止めていた。後で冷静に考えると、妨害活動を当然とする感覚は明らかにおかしい。許してはならない行為だ。右翼の行動を当たり前のことと受け止めている自分自身の存在に、ある意味ショックを受けている。正当な集会を妨害する右翼の行動については、民主主義への敵対行為として厳しく糾弾する姿勢をどんな時も忘れてはならないと思う。

第16分科会「思春期・青年期の進路と教育」

退職後もがんばる姿に感銘

岡山支部 美甘 晃

第16分科会「思春期・青年期の進路と教育」の分科会責任者として、今回の教育のつどいに参加した。

事前のさまざまな準備と打ち合わせののち本番となったのだが、会場が実行委員会事務局のある西河原プラザ別館であったこともあり、全教本部の書記さんが多くの業務を手際よく主導してくださって、スイスイと事がすすんでしまった。

お陰で分科会論議をじっくり聞くことができたが、部分参加のみで岡山の通し参加者がいなかったこともあり、最後の最後に県内の定時制統廃合の現状の説明を求められて、しどろもどろで答えるという羽目にも陥ったが…。

分科会参加者の多くは、ベテラン・各都道府県の論客といったところで、熱い議

論が続いた。他の分科会もそうだと聞いたが、定年後再任用の参加者も多く、日ごろの活躍ぶりを明るく報告いただいた。まだまだ引退は許されないと伝えられた感が大きい。

若い人では、東京の中学新採用2年目の女性のクラスでの奮闘ぶりや、大阪のひきこもり・若者支援にとりくんでいる一般男性2名（自らもひきこもりを克服）の報告が印象的であった。

第17分科会 ジェンダー平等と教育

久しぶりに学習意欲が沸いてきた

岡山支部 和田 知恵子

私にとっての組合活動とは教研だった。ずいぶん組合には勉強させてもらった。少しはお返しを、と思い要員として参加した。受付と分科会現地責任者という役割だったが、またしても学ぶことの方が多かった。

分科会は「ジェンダー問題を考える」に参加した。この分科会は私にとって初参加の分科会だが、「こどもの権利条約」NGOレポーとして国連に提出する「性的マイノリティの子どもたち」の報告があるので、その応援にという気持ちが強かった。

この報告は岡山市の子どもへのアンケートをもとに、性の違和感に悩んでいる子どもが少なからずいるということ、そしてこんな悩みを持っているということを知ってほしい、というものだ。また、どの子がどうか、とか、好奇心を持って探るなどしないで、不用意な言葉は発しない教師であってほしい、という願いが報告された。

授業としては、国語、社会、家庭、性教育などで取り組まれていた。家庭科の男女共修が男女差別解消に影響を与えているように、ジェンダー問題も体系的に取り組めたらもっと住みやすい社会になるのにと考えさせられた。ジェンダーの問題は社会変革につながる問題だ、という認識は持てた。男女別名簿、夫婦別姓、育児休暇取得、などなどのジェンダー問題は、民主的人格の形成と大きく関連していると思った。

久しぶりに学習意欲が沸いてきた。

岡山開催を改めて実感した

岡山支部 岸本 幹雄

初日の8月18日(金)は要員をしなくてもよかったので、朝早めに岡山に出て、岡山駅からシンフォニーまでを歩いていく。警察官が随所に立っていて、右翼の街宣車は市街地には入って来なかったし、かなり立てるような場面はなかった。シンフォニービル前でソフトな口調で、「教員が政治活動ばかりしているので、不登校やいじめが増加している」とマイクで話しているくらいだった。会場までは南口から入場したが、知り合いの先生があちこちに要員として立っていて、岡山開催を改めて実感した。

19日(土)20日(日)は第18分科会「子どもの人権と学校・地域・家庭」の要員として参加。役割は分科会責任者だったが、初日のレポートなどの荷物の運び出し・会場設営に少し時間がかかったくらいで、あとは一人の参加者として、分科会に参加して何回か発言もできた。

2日とも参加者は25人くらいであった。レポートは「中学生・いじめ自殺事件」「DVにさらされた子どもにかかわって」「生徒指導規程の破綻と新しい学校づくり」「働くルールの学習2016バージョン」「帰国・外国人の児童生徒とかかわって」「地域教育懇談会と子どもが主役の取り組み」の6本と、かなり多岐にわたっていたが、「人権」というキーワードでそれぞれがつながっていると思った。また、現在の日本で様々な問題が新たに起こっていることを知ることができた。その中で「生徒指導規程の破綻と新しい学校づくり」は福山からの報告で以前からいくらか耳に入っていた「ゼロトレランス」とか生徒指導のマニュアル化が広がっている様子が報告されたが、こんな学校があるのかとビックリした。岡山開催ということで、岡山にしながら、全国の様々なことが聞けたことが今回の収穫であった。また、退職後も地域とのかかわりを持ちながら一市民として活動が続けている方がいることもわかり今後の参考になった。



「遊びは子どもの主食です」に共感

岡山支部 山本 和弘

運営の必要に応じて、たまたま「割り当て」られたのは、「文化活動・図書館」という分科会でした。でも、その内容は、期せずして長年の問題意識と響き合うものでした。

あくまでも、会場係として、縁の下で支える裏方に徹するつもりでいましたが、レポート発表や議論が興味深く、ついつい聴き入ってしまいました。

この分科会の共同研究者の一人、増山均先生が、「遊びは子どもの主食です」という印象的なフレーズを、キーワードとして紹介してくださいました。昔から「よく学び、よく学べ」と言われるように、「遊び」は「学び」の添え物ではなく、子ども人間として育つための、なくてはならない主食なのでした。

この分科会で重視された「子どもの権利条約 31 条」。これまで意識してきませんでしたが、その重要性を改めて痛感させられました。「休み、遊ぶ権利」は、確かに子どもの根源的権利！と思い至った次第です。

「あそび・遊び」は
子どもの主食です！



第 31 条

1. 締約国は、休息及び余暇についての児童の権利並びに児童がその年齢に適した遊び及びレクリエーションの活動を行い並びに文化的な生活及び芸術に自由に参加する権利を認める。

2. 締約国は、児童が文化的及び芸術的な生活に十分に参加する権利を尊重しかつ促進するものとし、文化的及び芸術的な活動並びにレクリエーション及び余暇の活動のための適当かつ平等な機会の提供を奨励する。

【日本協会によるユニセフ協会による抄訳】

休み、遊ぶ権利 子どもは、休んだり、遊んだり、文化・芸術活動に参加する権利があります。

特設分科会「特別の教科 道徳」を考える

重い気分の一方で、勇気づけられた一日

備西支部 清水 親義

岡山高教組の応援として、8月19日に「教育のつどい 2017 in 岡山」に参加してきました。かつては日教組との共催で全国教研として開かれていたものです。もちろん参加とはいっても、討論などへの参加ではなく、会場スタッフとしての参加です。

実際の仕事としてはマイク係で、発言者の前までマイクを運ぶ仕事です。私より若い先生の挙手を受けて、おそらく会場で最高齢の私が、マイクを持って走る姿は少々滑稽であったかもしれませんが、結構充実感の感じられる数時間でした。

いよいよ「教科としての道徳」が始まるという事で会場はちょっとした緊張感に包まれていました。世間一般の理解としては道徳は必要なもの、反対する必要のないもの、と受け取られるものですから、これが「教科」として扱われることの危険性を父母に理解してもらうことの困難さは、想像に難くないところです。

当面は真の狙いは覆い隠されるでしょうが、やがては戦前の「修身」を目指すであろう兆候が既にあちこちで見られるという発言が目立ちました。

こんな笑えない話の紹介もありました。現在行われている道徳教育の正体が垣間見える話です。

ある県の道徳教育の指導的立場にあった管理職が、いわゆる発達障害を抱えた生徒がいるクラスで特別に道徳の授業を行い、その授業の中で、黙ることができない生徒の状態に腹を立てて、その授業のねらいから考えても、言うてはならないような内容の罵声を浴びせたというのです。人権を尊重できないような教師が、その県では指導的な立場にあったというわけです。

この分科会で問われていたことは、「あるべき道徳は、国家主義の道徳なのか、国民主権の道徳なのか、そもそも教科として『道徳』が存在していいのか？」ということだったように思います。

いろいろな報告を聞くうち、重い気分になる一方で、国家主義の道徳と正面から戦おうと実践を続けている全国各地の教師の姿を見て、勇気づけられた一日でもありました。

かつての職場での教科のメンバーが、ほとんどそのままの顔ぶれで、30年以上も続けておられるという恒例の旅行について、埼玉在住の武田昭一さんから文章を寄せていただきました。

「よく続く旅のはなし」

備南支部 武田 昭一（埼玉在住）

珍しい事ですね」、とみんな驚いたようにいいます。確かに珍しいことですね。毎年8月1日から3日間、30年以上前の、児島高校のある時期の、国語科のメンバー（当時、50代のベテランから新採の若者まで）がほとんどそのままの顔ぶれで旅行を続けてきたのです。毎年のカレンダーに真っ先に書き込んでもいい不動の日程で、ことしも紀伊半島半周の旅（十津川温泉、白浜温泉）を楽しんできました。

旅行の淵源を尋ねれば、1980年代初頭の、当時の国語科の親睦旅行に到りますが、これは当時でも他教科から「よく行くなあ、仲がいいんだなあ」羨ましがられるようなあんばいで、旅行が続いていました。時移り、世は変わり、あの頃のメンバーは、人事異動により、また年の上のものから順次退職し、すっかり別れ別れになりましたが、やはり何かの吸引力が残っていて、21世紀に至り、旅行は勃然として復活して今にいたっています。

常連メンバー6～7人、毎日学校で顔をあわせていた1970年代後半から80年代前半にかけて、どんな日々だったか、脈絡があいまいになってしまいましたが、いろいろ思い出します。「民主教育」をめぐる激しい動きがありました。高生研が活発で、集団作り、学級作りなどの議論や実践があり、教育を語る会が地域で持たれたりもしていました。主任手当反対闘争などもこのころだったのでしょうか？「職場の民主化」で校長につめ寄った時期。「実力行使」の時代は過ぎていましたが、総じて議論の盛んな時代でした。旅のメンバーはその中で、温度差はともかく、それぞれのスタンスで支えあっていて、何よりも真摯な高教組の組合員でした。キャラクターとしての相性というのも大きいでしょうが、それらが混ざり合った結果として、まさになん十年にわたって「珍しいこと」が続いてきたのだ、という気がしています。幸い有能な（かつ永久の）幹事長F氏（いつのまにか高退教事務局長になっている）がいて、また、懐が深い太陽のような長老F氏がいて、我らが旅は終わ

りを知らない、と強気で言いたいけれど、「お互い体大事にしような」と言いあって年ごとに来年を期しているような昨今となりました。しかし、とにかく楽しい。

思えばいろいろなところへ行きました。岡山から2泊で車で行くのが基本のパターンなので、超遠距離は行けませんが、その範囲で行かないところは先ずなくなりました。でも、2度目もまた楽しい。ハプニングは一回ごとに違うし、名所旧跡掘り出せばいくらでもある。昔見たものでも思い出のエピソードが加われば新鮮だ。なんと言ってもいい宿と料理と酒が待っていればすべてOKなわけですが。

話題は山ほどあるけれど、旧職業がら教育の話が多くなるのは成り行きで、結論から言えば「昔はよかった」だけれど、今と何処が違うかの分析にはいると、やはりプロらしくなってきた、現代を切りまくる。高教組運動を含めて「あの頃」をいまごろ「総括」することになりますが、年をとってきて、みんな頭が良くなってきたようです。これはほんとですね。年をとるのも悪くない、といわれるのはウソではありません。

昔教えた生徒たちの話、教材になった古典・現代の文学の話、地元児島の情報、病気と薬の話（これは避けて通れない）、退職後始めた農業のワザをめぐる話題、ネット情報との付き合い方、特攻隊に行きそびれた長老F氏の戦争体験などなど——。話は脈絡なくどんどん流れていくのですが、絶えず笑いが起こるのは、みんなが「お笑いタレント」に「一時的」になっているんでしょう。面白いことは、素早く言わないと、どんどん行ってしまいます。かくいう私は埼玉県の方ほうに来てしまって、参加にかなりのハンデがあるので（でも、旅行参加は皆勤賞です）、あるとき、岡山までの道のりを節約して、現地参加しました。そうしたらこうなりました。私が取って置きの面白い話を持ち出したら、「その話はさっき済んだよな」。別の話を出したら「それももう済んだよな」——という具合になって、何かおいしい部分を大きく取り逃がしたような感じだったので、それ以後、必ず出発点から一緒に行くようにしました。

なにはともあれ、不滅の人間関係、よく続いています。来年は旅行発足当時、新採用だった最後の現役メンバーが定年です。これで全員定年後。記念じゃないけど次回は久しぶりに新幹線を使って長躯長崎を企画（と幹事長のF氏は言っている）。楽しみです。

参考までに、21世紀に入ってからの旅を一覧すると次のようです。

2002年 長野県岩崎ちひろ美術館・妻龍・馬龍など
 2005年 島根県三瓶・石見銀山・松江
 2006年 愛媛県内子町・大洲・天狗高原・土佐和紙会館など
 2007年 能登半島一周
 2008年 大分県国東半島・大宰府など
 2009年 佐賀県唐津・吉野ヶ里遺跡など
 2010年 滋賀県彦根城・京都丹後半島など
 2011年 三重県伊勢・熊野三山
 2012年 島根県隠岐の島
 2013年 高知県足摺岬・愛媛県宇和島・別子銅山跡など
 2014年 三重県斎宮歴史博物館・伊賀上野・奈良県吉野・室生寺など
 2015年 島根県しまね海洋館アクアス・石見銀山跡・奥出雲『砂の器』の舞台など
 2016年 山口県萩・金子みすず記念館など
 2017年 奈良県十津川村・和歌山県白浜温泉と南方熊楠記念館など

2002 年安曇野の旅（さすがにまだ若い！）



2017 年 紀伊半島半周の旅

会報 148 号で紹介された「備南支部春の交流会」での、正保宏文さんによるミニ講演会「無謀な世界一人旅」が好評でした。「子育て教育何でも相談ネットワーク」の通信にも連載記事を執筆されているので、お読みになった方も多いと思いますが、改めて「会報」に原稿を寄せていただきました。

無謀な世界一人旅（第 1 回）

備南支部 正保 宏文

無謀な世界一人旅は、私が退職した 2013 年に、世界一周航空券を買って、7 か国を訪問した時のものである。字数の制約もあり、今後、一人旅をされる予定の人のための参考になればと恥を忍んで“思い出”を記してみた。

なぜ一人旅になったかという妻に振られ、知人にも振られたからである。今では、振られたことに感謝している。高校時代の教室の片隅にあった雑誌に、ある若者がシベリア鉄道へ乗って世界をめぐる話が載っていた。それを読んで、世界旅行にあこがれたのが、旅の始まりであった。旅をするにあたって荷物は機内持ち込み可能なデイバッグ一つと決めていた。これなら荷物が行方不明になることはないし、トイレで用便をするときも困ることはないからである。着替えが少なくて済むように、毎日ホテルの風呂で洗濯することにしていて、洗濯物を固く絞った後、バスタオルの間に挟んで足で踏めば水分をほとんど取り除くことができ、翌朝までに乾くのである。

私より後に退職した人は、150 万円、150 万円、100 万円と 3 年間にわたって退職金が削減されたが、私まではかろうじて満額支給されていたので、40 数万円のエコノミークラスではなく、自分へのご褒美として 70 数万円のビジネスクラスを躊躇なく選んだ。ビジネスクラスでは、エコノミーと違って、ラウンジが使える、機内



食のグレードも違うし、座席の広さも違う。だが、それが地獄の始まりだった。

成田を出発して、食べたこともないようなステーキが出てきた。当然赤ワインをお願いした。そしたら若くて美しいCAさんが何回も何回も赤ワインをついでくれた。貧乏人の悲しさから、ついつい調子に乗って飲んだのがいけなかった。翌朝、痛風発作を起こしてしまったのだ。右足に激痛が走る。「こりゃあ大変なことになった」と思った。

NYに着いて、2日目にメトロポリタン美術館へ行ったが、歯を食いしばりながら展観した。足は、悲鳴を上げていた。しかし、語学力ゼロの私には、病院に行く気力も勇気もなかった。仕方ないので、くそ度胸を出して、ドラッグストアへ行くことにした。

しかし、私の英語は店員に伝わらず、店員は、靴が私の足にフィットしていないのではないかといった。私は、「痛風だ。」と言いたいのだが、単語が分からず、痛い所を指さして、「ペイン、ペイン。」を繰り返した。そうすると思案していた店員が、飲み薬と塗り薬をもってきてくれた。私は、それを買うしかなかった。

アメリカ人の体格を思い浮かべると、アメリカ人と同じように薬を飲んで胃がやられないかと不安がよぎったが、もはや、どうすることもできなかった。運を天に任せることにした。「溺れる者は、藁をもつかむ。」の心境であった。

一事が万事こんな調子で旅は進展していった。4日目、NYを離れるため、ニューアーク空港を目指したが、切符を買う際、悪い予感が的中して自販機で失敗、何ドルかカードから引き去れてしまった。気を取り直して、窓口へ行った。ところがである。カウンターに、これから回る国々の行先を地図落とししたファイルを忘れてきてしまったのだ。電車の中で気づいたのだが後の祭りであった。

悪いことに追い打ちをかけるように、まずいことをしてしまった。ニューアーク空港へ行きたいのに、降りるべき駅を乗りすごしてしまった。駅の看板に「ニューアーク空港」の文字がなかったのだ。(略号で「EWR」と記されていることを忘れてしまっていたのだ。) 特急電車は、どんどん進んだ。車掌がやってきて、引き返せという。でも、どこで降りたらよいかわからない。そんなときに中国人の若い女性が助けてくれた。次に降りる駅から引き返すべき駅まで路線地図を書いて渡してくれたのだ。私には、その美しい女性が天使に見えた。私は感謝の「ありがとう」を心込めていった。痛風のために自然史博物館を早めに切り上げて移動したのが、功を奏した格好になった。「人間万事塞翁が馬」である。(つづく)

60 倍の収量が望める「ジャガ芽挿し栽培法」

備西支部 清水親義

常識の方が実は非常識だったということが、野菜づくりでは結構あります。「野菜に肥料は必須」が常識のはずなのに、固定種を二年連続無肥料栽培して採種すれば、キュウリでも茄子でも白菜でも無肥料で巨大に育つ種が出来ることはもはや疑う余地もなく、これは我が家の畑で証明済みなのです。

そんな「新常識」の栽培法の一つに、1つの種芋から60個のジャガイモを取る「ジャガ芽挿し栽培法」があります。

1、20本の芽（苗）が3個ずつ芋をつければ

1つの種芋から20本の芽を取って、これに3個ずつ芋がつけばなんと60倍。

一度に出る芽は多くて7?8本です。これらを一本一本、根付きの苗として畑に植え、残った種芋はもう一度土に埋めてやると、また芽を出します。これを3度繰り返し、最後は種芋そのものも畑に植えてやる（慣行農法は、この部分だけをやっていることになる）と合計20本前後になるわけです。



2、最大のメリットは早くから準備ができること！

実際のジャガイモ栽培で迷うのが種芋を土にふせる時期です。春作では霜を心配し、秋作では暑すぎて種芋が腐るのを心配します。

しかしこの方法なら 早くから苗作りができます。箱に土を入れて7cm程度の深さに種芋を寝かせ、2月は暖かくし、8月は涼しくしてやれば良いのです。もちろん出来た苗を畑に移植した時は、春先はビニールや不織布などを掛け、夏は遮光ネットや寒冷紗などを掛けてやる必要があります。

畑での苗作りもちろん ok です。

3、5cm～10cm に育った芽を苗とする

地上に出た芽が5cm～10cm になったら種芋を掘り出して芽を種芋から外すのですが、割と簡単にごっそりと外すことができます。これを一本一本根を傷めないように分け、株間15 cm（通常より密植）で、1本?2本ずつ谷底植えにして、根付くまで灌水します。

4、今後の課題

秋作で種芋を切らずに済むので、腐る確率を減らすことが出来るのですが、芽を取った後の種芋に腐るものが出てきます。平均 20本以上のためには、「腐らせないこと」に尽きますので、腐らせない方法を模索中です。

私はやっておりませんが、サトイモ栽培も同じ栽培法が使えるそうです。



5、栽培法まとめ

- ①種芋を切らぬまま、深さ7 cm前後で埋める。
- ②地上に出た芽が5cm～10cm になったら種芋を掘り出し、芽を外す。芽は一本一本に分ける。
- ③芽をもいだ種芋はもう一度土に埋めて芽を出させる（3 度繰り返す、最後は種芋そのものを畑に植える）。
- ④株間 15 cmで谷底植え。
- ⑤育ってきたら両脇の土を戻す土寄せ。



※ 無肥料栽培種子・固定種は「野口種苗」、ジャガイモは「ジャガ芽挿し栽培」で検索して見て下さい。

※ ジャガイモは、肥料を使った方が有利のようです。私は無肥料種芋育成中なので不使用。

2017・3・11に少し考えたこと。(第2回)

岡山支部 佐藤 静雄

12日は、岡山パブテスト教会であった、＜3・11への祈り―追悼と脱原発のつどい―＞に参加した。キリスト教、仏教、黒住教、イスラム教などの宗教団体が垣根を超えともに開催していた。また、多くの草の根系市民団体、高教組、医労生協など少しの労組なども共催・協力していた。その集会で、「3・11わたしの想い」として岡山に移住または避難されている人からお話しがあつた。東京から一人、福島から二人である。三人に共通している気持ちは、まだ幼い子供を育てている世代の人である事である。東京から総社に移住した女性は、東京ではキャリアウーマンであつたと。

新宿の空しか見えない世界から総社の生活は、自然にあふれ小川でつい魚に見入ってしまうとの事。夫も岡山で仕事見つけ間もなく新居が出来るとの事。また、玉野に避難して幼子を育てている男性は来月には、いわきに帰るとの事。もう一人の女性含め人生を大きく変える7年であつた事と思う。

この集会のメイン講師は、元経済産業省のキャリア官僚で在職中に官僚機構を批判した書籍を出し、その後退職し多くの活動されている古賀茂明氏であつた。今、フォーラム4などの代表をつとめる。テレビ朝日のニュースステーションで何回か発言を聞いたり、国会の参考人にも呼ばれている。権力と闘う強い人と思い身体の高い人と思いきや比較小柄な人であつた。以下、狭い会場椅子でメモ取りづらく少し頭に残った事など記す事にします。講演は90分という限られた時間でもう少し聞きたいところが多いものでした。内容は、特に目新しいのものではなかったが、実際活動されている人から直に聞く事は大いに刺激になった。原子力発電については、欧州では、自然エネルギーの不足分として火力発電、原子力などが補てんするという仕組みになっている。が、日本では、逆に火力原子量を補てんするのが自然エネルギーという。ゆえに家庭などでつくられた自然エネルギーを電力会社が買い取り拒否する事態も生まれて来た。去年の原子力発電すべて停止でも日本で電気不足の事態にならなかった。また、発送電分離の遅れ、日本の原発建設が欧州にくらべかなり安いのは、安全軽視とか。また、日本の国民一人当たりのGNPが90年代は世界で3～9位であつたものが、現在は26位であう。これは、相対的に日本が弱くなっている事か。円安は、すなわち日本の価値が下がっているという事か。多くの政治家たちは、円安歓迎したい大衆もいるが。官僚と政治家の関係は、古賀氏がキャリア官僚であつたゆえの話である。国会議員になると夕食は、ほとんど毎

日のごとく宴ありて困らないが、朝食に困る。しかし、毎日ある官僚との朝食勉強会に行くと幕ノ内弁当が出るのでまた困らない。官僚たちも幕ノ内弁当に喜ぶ。国会質問の折りは、官僚たちが質問応答に至る原稿を準備してくれる。未明まで準備してくれる官僚に何も言えなくなる。そして、官僚たちは議員会館に議員たちの困り相談に行きいよいよ何も言わなくなる。先日、文科省の天下りが問題になった。しかし、永田町では天下りのどこが悪いかとの空気らしい。官僚も官僚に飼いならされた政治家たちでもある。他の省庁はほとんどやっている。それは、出向とか法律改正でどうどうと。もとより関連機関多くあり困らない。それが文科省都の違い。この天下り、マスコミも問題にせず何が悪いかというらしい。マスコミも関連会社多く作り定年後は関連会社の席が用意されているのは同じ仕組みゆえ疑問感じないとの事。古賀氏の表現とは同じではないがこれが実態だろう。この構図は、おそらく地方役人と自治体議員についてでもあるのだろう。文科省が県教育職に代わるだけの事。土木、建築、福祉いくらでもある。再就職は、関連組織で能力を生かすとも名目で。そして、地方マスコミも問題にしない。また、東京で小池人気ありそうだが、それは地方行政組織の改革で人気あるが、大阪で橋本人気があったのは同じ地方改革で人気を得たもので、国政に出ると本音がでる。そうすると二人とも保守、右傾姿勢が顕在化し保守改憲勢力の一翼を担う事態になる。橋本大阪維新はその典型だろうと思い聞きました。

古賀氏のフォーラム4について少し記す。改憲勢力とは無論組む事はない。なた、選挙のための野党連合でもない。革新を標ぼうしつつも改憲タカ派の多い民進党、維新とも組まない。添付の図を参考にしてもらいたい。そして、民主組合派、連合も批判する。「第Ⅳ象限—改革はするが、戦争はしない」とする。基本理念を少し記してみる。あくまで市民を中心に置く。原発は再稼働せず、世界一の自然エネルギー一大国を目指す。集団的自衛権の行使は違憲との立場を堅持し、認めない。ゆえ9条改正に反対する。情報公開を徹底的に進め、表現の自由、報道の自由を回復する。・・・・・・などなど基本理念を読んでみてもらいたい。

疑問がある。なぜに酷い政治家、品位の欠けた政治家に対し批判を繰り返すニュース番組、批判する言説家も多いのに世の中変わらないのだろうか。国政選挙で酷い候補を選ぶのも国民である。なにが起ころうと我が家の近所のパチンコ屋は毎日車でうまる。結局のところ、国民が育っていない事だろう。人間が人間として育つ仕組みが世にないという事だろう。主権者教育がなされていないという事だろう。大学生の多くは、ほとんど本を読まないとのデータをいつか見た気がする。高校時代は、多くの体験、情報のもとに多感な季節にも関わらず、通過儀礼としての受験学力に追いやられ活字を追わない。こうして生まれた大学生が本を手にする事はない。政府がいう日本の成長産業としての漫画、アニメ化か。通過儀礼としての受験

は、努力集中する事で意味があるという人がいるが私は疑問である。以前、私は18才選挙権の施行に反対した事がある。ある人は、子どもの権利条約として大変意義があるという。感性、雰囲気を選ぶのではなく政策が理解出来て選ぶという主権者教育がしっかり出来てこそである。教育現場は受験学力を付け偏差値の上位の学校に入れる事が問われる。教師たちは多忙を理由と居直りで考える事を放棄しているのではなかろうか。故、教師も学習しなくなる。ある日、現職の教師たちと話す機会があった。雑談の折り、私が受験指導の問題を口にしたとたん、その場の空気が変わる気がして次の言葉をのみこんだ。教師たちは、「生徒の希望をかなえてどこが悪いんだ。」と思っていたのかもしれない。話題を変え、とりとめない話に終始した。ほんとうは、心に葛藤あるかもしれなく、あつて欲しいものである。学校とはなんだろう。学校は、なにを学習させたら学校だろう。教育、学習とは、新しい発見新しい知識を得る喜びではなかろうか。この多感な季節に通過儀礼のために膨大な受験学力のための時間消費はいかがなものだろうか。また、教育誌の廃刊が相次いだ。教育理念誌というより教育現場の実践交流としての雑誌である。生徒に教師にも意味があった月刊誌であった。たとえば、金八先生の原作を出した高文研の「考える高校生くのち、ジュパンス」と改名」、ぎょうせいの「月刊ホームルーム」高校出版の「月刊高校生」などである。福島の実家の吉沢さんは、千葉の佐倉高校で図書委員をしていた時に「考える高校生」の配布係をしていたとか。ずいぶん勉強になったとの事。しかし、今こうした実践誌はどこにも見当たらなくなったのはなぜだろうか。

1954年の＜池田・ロバートソン会談＞を思い出した。戦前の国家主義的教育を反省すべく新憲法が作成され、子どもたちには文部省から憲法のやさしい説明書の、「あたらしい憲法のはなし」が与えられ国民主主権があるとされた。それが、この会談ではそれまでの戦後教育が間違いであるとして教育と広報で教え直すとしている。戦争は、絶対悪として軍備を放棄したとする教育ではなく教育と広報で再軍備する空気をつくると日本は、アメリカに約束した。そして、全面講和せずアメリカとの安保条約に繋がってゆく。そして、道徳が出来た。今、検定教科書として始まる。広報とは何だろう。政策的のみならず、民間のマスコミは含まないのだろうか。マスコミは、世論誘導に大きな力になる。マスコミの現状に先の古賀氏も疑念あるとしている。政治的な事を抜きにしても、受験期になるとリベラルと自任している新聞社の週刊誌で東大、京大合格高校番付など数か月間続く。マスコミは、ジャーナリストとしてのスタンスよりより利益を求める総合企業であるかもしれない。

私は、教育、選抜の仕組みをどう変えるべきか分らない。言える事は受験学力に追われる時間は意味がないのではないかという事。受験学力に努力する事は人生

意味があるという人がある。しかし、もっと真の学力のための時間であってほしいと思う。私は、長い通過儀礼の時間を払わない工業高校卒で研究者になった人を知っている。彼は、大学を目指してからは合格目指し努力をした。しかし大半の高校生活は部活を含め楽しく過ごした。今彼は考古学の研究者としていい仕事をしている。そこには、既成の学問にとらわれない自由な発想が生まれているようにみえる。

「追従笑い撲滅委員会」を立ち上げた人がいる。朝日新聞政治部次長の高橋純子さんである。彼女は、笑い声が大きいほど表情を硬くするように努めているとする。＜2016・9・18朝日＞だがこんなで事でも、大勢の中でゴロンと異物になるのは意外に精神に負荷がかかる。でも、自分の弱さを把握し姿勢のゆがみを整えられると。私も集団、仕事の仲間の中で違和感を覚えていたかつて苦笑せざる日々もあった気がする。しかも、過剰付度する人になかなか抵抗できなかった日々もあった。一人よがりでも妥協はやめようと今は思う。でも気負い少なくゆっくりと……。また、厚切りジェイソンという芸人はいう。「やりたいことがある」という人には、僕は、「じゃあ何でやらないんですか？」と聞くんです。多くの人は、やりたいことに向けての準備を何もしていません。「いつかやりたい」と思っているだけで終わってしまうんですよ。・・と言っています。＜JAFMate2017/4＞なるほど元気ださなくてはとも。(2017・3・19)

事務局だより

▼突如降ってわいた解散総選挙。モリカケ隠しよりほかに、何の大義も見当たらない自己チュー解散。あわよくば多数議席をかすめ取り、信任を得たとばかりに改憲にまで進む狙いはミエミエ。これぞ国難！許せません。市民と野党の共同の力を、大きく育てて、立憲民主主義を取り戻すチャンスにしたいもの。野党も目先の打算に囚われず、信義を貫いてほしいもの。▼「消費税の使い道」などに依らずとも、政治がその気になれば教育費負担の軽減は容易なはず。

「百年河清を俟つ」わけにもいきません。今年も、さしあたり、「修学援助金」、「教育全国署名」のとりくみに、いっそうのご協力を。

▼本会報とともに、会員名簿 2017 年版をお届けします（二年ごとの改定です）。お知り合いの退職者に未入会の方がおられたら、是非

入会の働きかけをお願いいたします。▼高退教では、できるだけ「手渡し会員」を増やして、日常のつながりを深める一助にしたいと呼びかけています。財政逼迫の折から、発送費の節約にもつながります。よろしくご協力ください。▼自然歴史探訪の案内を同封しています。「成羽川上流に佇む天空の里」の秋を満喫しませんか？